

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ <http://shakatsusushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsusushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)3299-5367
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送) 350円・メール 175円

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

階級、国家、民主主義

『労働者の世界観』を学ぶ

森 勉……2

マルクス主義への確信 理論と実践

—今改めて「三池と向坂教室」に学ぶ(中)—

山下 俊幸……3

向坂逸郎先生と『資本論』のことども

—『資本論』百五十年 私の勉強法(上)—

中澤 秀行……6

読者からのおたより……………15

旬刊 社会通信

NO. 1225

二〇一六年一〇月一日号

二〇一六年一〇月一日発行
(毎月一日・十五日二回発行)

階級、国家、民主主義

『労働者の世界観』を学ぶ

向坂逸郎著「労働者の世界観」というと、若い頃に勉強した方もいるだろう。一九七三年に発行され、今でも「労働大学出版センター」から八四三円で出版されている超ロングセラーである。反合研ではこの本を使った学習会をまる二年かけて、一九回の学習会を行ってきた。多い回で十人、平均六・五人の参加。通算十一回以上の参加（大まけの出席点達成）は七人であった。今、『労働者の世界観』の内容を大きくまとめると、

1、史的唯物論に関して、第五章まで

自然（地球）の一定の発展段階に発生した人間は、自然に働きかけて生活の手段を得るが、動物と異なり、自分以外の自然のもので道具を作って働きかける（労働）。意識的に労働手段を工夫し、計画性のある労働が、人間の生活を豊かにし、歴史や文化を発達させた。労働なしに人間の社会は存続・発展しない。働く人間が社会の主人公である。

自然の法則を知り、それに適応することによって人間の可能性が広がり、人間は自由な行動者になる。それと同じように、社会についても必然の法則を知り、これに従えば人間は自由になる。歴史を作るのは人間であるが、その時に置かれた条件でしか次の社会を作ることはいかない。

マルクスは、人間の社会が、どのように発展するのかわはじめて明らかにし、資本主義を分析して、この社会の根本的な矛盾が、必ず社会主義社会を実現させることを証明した。社会主義の必然を、資本主義の社会に見出し説明したのが『資本論』である。こうして、歴史が真に科学的に理解され、社会主義が科学となった。

2、資本主義の生産関係（経済構造）について、第六章〜第八章

現代の日本の社会は、生産手段を私有する少数の資本家階級と、生産手段を持たず自ら生産的労働をする圧倒的多数の賃金労働者階級が対立しながら社会を作る。生産手段を持たない労働者は、自分の労働力を資本家に売って、それで得た賃金で生活するほかに方法がない。

資本家は、労働力を売る他に生きる方法がない多数の人間の労働を搾取することによって、富を蓄え、これでさらに生産手段を買って事業を拡張し、さらに莫大な利潤を獲得することができる。資本が蓄積され、設備投資が増大し、生産力は大いに上がり、資本家たちが儲けることに有頂天になっていたら、恐慌状態がはじまった。労働者は賃金を引下げられ、失業する。資本家は労働力を買わない自由を持ち、「首切り」によって人間を路頭に迷わせても、何の罪にも当たらない。労働者の生活は、生産力が高くなるほど不安定になる。

3、国家・憲法・民主主義について、第九章〜第十五章

労働者階級が、資本の都合しだいで生活を奪われるということは、資本主義的社会秩序が続くかぎり、なくならない。国家権力はつねに、資本の背後や前面で、働く人間の生活を奪うことのできる社会秩序を支えている。今日のごく少数の支配階級が、多数の働く国民への搾取と抑圧を維持するには、教育、マスコミ等を占有しているだけでは足りず、強大な権力機構を持つていなければならない。階級支配の維持と被支配階級の抵抗の抑圧の機関として国家がある。国家権力は公平な第三者の顔をしようとしても、階級支配の道具である。労働者階級が、社会主義社会を作り上げるには、階級闘争により、国家権力を資本家階級から奪い取って自分の手に握らなければならぬ（＝社会主義革命）。

「日本国憲法」もブルジョア民主主義憲法であり、個人の自由の確立とともに、私有財産制を土台にしている。憲法でいう「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を完全に獲得できるのは、生産手段の社会的所有に基づく社会主義社会だけである。ブルジョア民主主義は、資本主義社会の確立にとって不朽の業績を残したが、少数の資本家が労働者の労働を搾取する社会を維持する政治であり、実質的内容はブルジョア独裁である。

労働者は闘わない限り、賃金も労働時間も生命の安全も確保できないが、たとえ形式的ではあっても、「思想の自由」「結社の自由」「政治活動の自由」等を持たないと、実質上の民主主義（社会主義社会）を実現する手がかりを失う。ブルジョア民主主義が形式上のもので、独占資本によってその実質的土台が奪われていても、我々は、生活を確保し、働く人間の社会を実現するために、これを必要とする。

資本の蓄積・集積・集中の結果、独占資本の支配する帝国主義の時代になった。独占利潤のために、巨大な独占資本が競争する時代である。労働者階級は、独占資本と対立する中小企業や農民をも集積し、独占資本を孤立させる必然性がある。

この学習会ではいろいろな議論をしてきた。『自然に働きかけるといふ人間の労働が、人間自身と社会を発展させる』という考え方は、パソコン仕事に慣れた現代人にはなじみにくいかもしれないが、米を作ったり、石炭を掘ったりする労働だけでなく、土の微生物から途上国の多くの患者を救った抗寄生虫薬ができた話（大村智さんのノーベル賞受賞）などが興味深い例であることや、安倍政権の戦争法案や改憲に関して、『憲法を守る』民主主義を守る闘いの大切さなど、多くの議論ができた。（森 勉）

マルクス主義への確信 理論と実践

―今改めて「三池と向坂教室」に学ぶ（中）―

向坂逸郎

検挙、投獄 次に向坂逸郎先生である。一八九七年（明治三〇年）福岡県大牟田市に生まれる。五高文科を経て一九二二年東京大学経済学部を卒業後東大経済学部助手二年、次いで二年半ドイツ・ベルリンに留学。一九二五年（大正一五年）九州大学教授に任官。一九二八年の「3・15事件」で大学を追われ、一九三七年の「人民戦線事件」で検挙

され投獄される。敗戦によって再び九州大学に復職し、一九六〇年定年退職。戦前の三年間と戦後の十四年間九州大学の教職を務めたが、一九三三年(昭和六年)から十八年ほど、牢獄と自宅で浪人して文筆活動。

今、私の手元に『文藝春秋』一九六〇年(昭和三五年)七月号に掲載された「我が生涯の闘争―赤の巨頭と呼ばれて」と題する向坂先生の論文がある。実に十一ページにおよぶ大作である。この中で、自分の生い立ち、雑誌『労農』や『労農派』の集団と活動内容、共産党との論争などたいへん興味深い話が満載である。

九大へ 「戦争中は保釈で出てきても、職業につくことはできず、はじめは翻訳をしたりしたが、これも訳者が私であるためにできなくなつた。主として百姓で食いながら、……ひそかに翻訳や代筆などやってささやかな現金収入を得た。」

「日本が負けて戦争が終わつたのは、普通の人より五日ほど早く知つた。私を監視していた特高係長が、八月二〇日の朝早くやってきて、ポツダム宣言受諾の話をして、「また、先生たちの時代になりました」といって帰つたからである。私はうれしくておどろいた心を押えて、泰然自若(?)としていた。この時のことを思い出すと、今もうれしい」

「敗戦後、以前に思想上の問題でやめた者は、復職させる」ということになつた。再び九州大学の教職についた。この時、私は再び大学教授になるつもりはなかつた。しかし、十八年前の学生のいく人かが、いま九大経済学部的首脳部にあるのを見、その人々にすすめられると、行ってみようかな、という気になつた。そして、東京に住みたいこと、いままで通り社会主義運動の中にあること、もし、大学教授の職と社会主義者とのいずれかを選ばなければならぬ場合には、間違いなく社会主義者の方を選ぶこと、などの条件をのべたら、それでよからう、ということであつた。私はよるこんで再び大学の教職についた。そして社会主義運動をやつた」

機械と人間 「どんな世の中でも、人間のために機械がある。機械のために人間があるのではない、ということとは真実である。だが、今日では、この根本的な真実が忘れられている。機械が発達すると、人間の生活が奪われるのが当然であると考えられている。それが当たり前のことになつている。人間の生活を奪う人間は善人で、奪われることに抵抗する人間は悪人であることになつている。……経営者がそう考えているだけではなく、世の中一般がそう考え、首切りがいつ自分の肩の上のしかかつてくるかわからない運命にある労働者の中にすら、首切りに対する抵抗を正しいと確信できない人がいる。そして、機械や利潤の都合次第で生活を奪うのは、社会の仕組みに由来することが忘れられている。」

「第一組合は、第二組合に分かれた人々と妥協しなければならぬ、という人がある。多くの評論家がそういう。しかし、第二組合が会社の意図にしたがつて分かれることを防ぐためには、あの場合どうしなければならなかつたか？ 三鉦労組は、首切りを全部認めなければならなかつた。第二組合が出して会社と妥協した条件は、根本において会社の「合理化」案をそのままのんだものである。つまり、首切りを全部そ

のまま認めるなら、こんどの闘争は、はじめからなかったのである。分裂がよかったというのではない。経営の体質改善という、極めて高度な技術がはいつてくる。そのためには、今後首切りは、続々とあらわれる。「首切り」自由の旧日本に返そうという意図を、挫折させるには、このさい分裂も止むをえなかった。強い大きな団結を作り出すために止むをえなかったというだけである。」

学習会 「昭和二二年（一九四七年）に、二十名ばかりの三鉦労組員とささやかに、学習会が始められた。その中に組合の執行部員は一人もいなかった。ただの組合員であった。しかし、偶然だろうが、素質のある人々であった。二十人が二十人つねに集まったわけではない。ほんの四、五人しか来ないときもあった。しかし、みなやめる気はなかった。つづけた。学習会のこつは、つづけることである。どんな障害があってもつづけることである。落伍する人もあったが、われわれはつづけた。」

「争議の時も、原則として学習会をやった。争議の時は、却って学習の度数が多くなる。学習を指導した学究者の数も大変なものである。……この学習会の特徴の二は、学習会に組合の幹部が組合の用か病気かでないかぎり、必ず出席しているということである。……私の経験によれば、強い組合ほど幹部も学習の中に入りこんでくる。弱い組合の学習ほどおざなりになる。しかし、このおざなりの中から、本気なものが生まれてくる。労働組合では、どんなに貧弱でも学習活動をやると、やっただけの効果は生まれる」

山川さん 「山川さんに、戦前であったが、労働者の都市大牟田について話したとき、そこにどっかとすわりこんで労働運動をやるといいですね、といわれたことがあった。戦後、九大に復職したとき、やはり、こんなようなことをいわれた。私は山川さんのこんな言葉を思いだしながら、私は、日本の労働運動を強くする外に、あの暗い戦前の日本の再来を防ぐ方法はないと考えた。民主主義の最後の衝きは、労働者の組織であると思った。いまもそう思っている。労働者の組織を一举に強くする方法はない。産業の各部門に、ことに基幹産業の労働者組織に、強い太い柱を立てることによって、労働者の組織を支える。このような支柱の数を増加する。そして、全労働者の組織を一段と引き上げる。さらに、その上に強い支柱をつくる。これをふやす。このようにして、全労働者階級を支える。このようにして、働く国民の民主主義と自由を支える。……民主主義や自由を口にするだけでなく、これを真実に守る力をつくるために」

向坂先生と灰原茂雄氏との往復書簡の内容や一つ一つの闘いの総括についても、非常に謙虚に丁寧に行われていることなど紹介したい事柄はたくさんあるが、ここまでで一応立ち止まって考えてみることにする。

昭和電工に入社

粉塵と高熱の職場 塚元氏は旧制中学から軍隊のパイロット、灰原氏は国鉄の橋梁設計の技師から軍隊をへて、三池の企画室。両氏とも元来優秀な頭脳の持ち主で、非常に人間的であったこと。若い職制からの名前の呼び捨て、オイコラなど、とうてい許せない正義感を持ち合わせ、自から労働者として目覚め、労働組合の強化を考えてい

た。

私は、向坂先生の言う「変わりもん」（前号参照）であった。その点、昭和電工時代からの私の同志である鳩川静氏（現・新社会党千葉県本部書記長は、塚元、灰原両氏のようなタイプであったといえよう。

私は粉塵と高熱の職場環境で3交替の肉体労働者であった。職場は真夏には六〇度以上あり、扱うものは九七〇度もある。真冬でも下着もつけず、作業着一枚。安全靴に防塵マスクをつけ、タオルで覆面しヘルメット姿。体力が自慢の私でもヘトヘトになる。現場の詰所には大型のクーラーと冷水器が設置され、テーブルの上には食塩が常備され、毎月定期的に栄養剤が配布される。それでも、あまり仕事では文句はなかった。みんな黙々と働いていた。ただ、言えることは皆、この重労働からいち早く抜け出すために、文句も言わず、ひたすら昇進試験に挑んでいた。私たちの仲間は昇進試験は受けないから定年まで平社員で現場作業員でいた。定年までの賃金格差、退職金の格差、その後の年金の差額を考えれば経済的には大きな損失だが、みんな人間らしく生きてきたことの誇りを持っている。

ご用組合 一九六〇年代初頭、高度成長期に市原の京葉工業コンビナートには、次々と大企業が進出した。昭和電工もその一つであった。三井造船、日本板硝子、古河電工、大日本インキ、富士電機、不二サツシ、旭硝子、丸善石油、住友化学、出光興産、宇部興産、チッソ、三井化学、東京電力発電所などの大企業が群れをなして存在していた。

当時、この中で、とりあえず市原地区労に加盟して、まともな組合といえは、合化労連加盟の日本板硝子（後に分裂攻撃を受け現在は少数組合になったが頑張っている）。大日本インキは、当時共産党の牙城とも言われたが今は、連合に加盟し最近地区労を脱退。旭硝子、富士電機も一時地区労に加盟したが間もなく脱退。

コンビナートの大手組合は軒並み御用組合であった。昭和電工も同様であったが、鳩川氏ら良心派の人たちが青年部に進出し、徐々に信頼と影響力を広げていた。その頃の私は、労働運動には全く興味はなく、ノンポリというより、ただ会社から嫌われていた一人であった。職場委員長（分会長のようなもの）は、現場管理者を中心に決められていたが、不思議に思うこともなかった。（山下 俊幸・つづく）

向坂逸郎先生と『資本論』のことども

— 『資本論』百五十年 私の勉強法（上） —

『資本論』に挑むにあたって

農業共済の職場にいた時、果樹共済の担当者として果樹農家の方々のお付き合いがありました。子供の頃、実家の裏畑には林檎の木が三本あり、国光が二本、赤デリが一本、秋になると美味しい実を付けたものです。年数を経ると巨木となりました。当時の林檎の木とは違い、現在は「矮化」された木で栽培されるようになりました。収穫までの木の手入れや収穫等、管理し易くなっている様です。

りんご博士 お付き合いました中に、林檎博士と言えるような方がいました。林檎農家として、初めて「矮化」林檎の栽培を手掛け、松本近郊のみならずこれを全国に広めると共に、私が仕事上お付き合いさせていただいた1995年頃には、海外からも林檎栽培の指導に招聘されるという大家でした。この方の研究熱心さには脱帽したのですが、生業である林檎栽培はご子息に譲り、ご自身は「洋梨」の研究をされていました。「洋梨を美味しく食べられるように出荷する為の研究は、林檎を美味しく栽培するより面白いし、研究の余地がある。」という事でした。

「洋梨というと、〃缶詰〃を思い出すでしょう！缶詰にするしか食べられなかった洋梨だが、収穫の時期を見極め、収穫後の追熟を上手にすると、こんなに美味しく食べる果物は無いように思う。」と言っておられました。自宅の土蔵の暗所で「追熟」させ、とろける様な甘さになった完熟のラ・フランスを食べさせていただき、納得しましたことを今も覚えています。私も教えていただき、ラ・フランス二本とコンフェレンス一本を畑に植えてあるのですが……、極めると言う事は、何事においても大変なことです。

『資本論』の読み方 エンゲルスは『空想より科学へ』の英語版への序文で「プディングのよしあしは食べばわかる。」(岩波文庫版105P)と述べています。先ずはきちんと食してみなくてはなりません。しかし、この洋梨のように、食べ物には美味しい食べ方というものがあるのだと思います。

名ピアニスト、ピアノの女王と言われるアルゲリッチによると、「天才とは、努力の方法を知っている人のことだ。」と言うことですが、果物にも食べ方があり、食材には料理の仕方もあるように、歴史科学書にも読み方、勉強の仕方といったものがあるのだと思っています。

向坂逸郎先生は『経済学方法論』の「河出書房版第一分冊の序」の中で、次のように述べられます。

『資本論』に対する誤解の多くは、この本の著者が、資本主義の運動法則を、どういう態度でつかまえようとしたかについて、十分に考えないことからおこる。

正岡子規の晩年の句に、〃鶏頭の十四五本もありぬべし〃というのがある。私の解する通りの意味かどうかよく分からないが、私は、この句のような態度で『資本論』を読んだらどうだろうと人にすすめたことがある。『資本論』の文字の内容にごく自然にじかに接触するような気持で読めといったつもりである。」

この通りだと思うのですが、しかし、実際に向き合うと「どうしたら良いのか!」と思ったものです。様々な取り組み方、勉強の仕方があるのだと思いますが、一つの手引として、自分が経験した『資本論』、これに挑戦する為の方法を紹介させていたかどうかと思います。

(一) 『資本論』岩波文庫版の旧訳から

翻訳の地、信州松本の扉 向坂逸郎先生は戦後「信州松本」の地で、三回に渡って『資本論』を訳出されていますが、なぜに「信州松本」に於いてなのか、これだけで一つ

の物語になります。

さて、一回目の翻訳は岩波文庫版旧訳です。全三巻は、第一分冊から第十二分冊として、1947年9月から1956年12月に渡って刊行されました。そして第一分冊だけは、「紙型が磨滅して、改訂版が出るようになった。」と言う様に、1958年3月に改訂版十八刷として刊行となりました。

第一分冊の「訳者あとがき」には、「この邦訳は、まずマルクス・エンゲルス・レーニン研究所版によって行われ、原本初版から三版、エンゲルス版、カウツキー版、二種の英訳及び仏訳等が参照された。右のマルクス・エンゲルス・レーニン研究所版には、レーニンの『カール・マルクス』とアドラツキーの序文その他の付録があるが、これは全三巻訳了後に訳出したいと思っている。」とあります。

そして、第十二分冊の「解題」の中の「五 あとがき」には、次のような一節があります。「なお、われわれの訳本の主たる底本となった『マルクス・エンゲルス・レーニン研究所』版には、レーニンの『カール・マルクス』、その他の付録があるが、それらはすべて、岩波文庫に何らかの形ではいつている。アドラツキーの序文は不必要と思うので略すことにした。」と。

『資本論』を読むために　そこで私の理解ですが、『資本論』を読むためには、事前にレーニンの『カール・マルクス』を読んでおく方が良い、予めマルクスがどんな人であり、マルクスの学説、とりわけ経済学説、社会主義論やプロレタリアの戦術論、そして基本的文献等を知っておく必要があるよ！と言う事の様には思っています。ちなみに、長谷部文雄訳の青木文庫版には、冒頭に『マルクス・エンゲルス・レーニン研究所』版序文と、続いてレーニンの『カール・マルクス』が配置されています。

このように考えますと、エンゲルスによるマルクス略伝である「マルクス葬送の辞」（新潮社版『マル・エン選集』第12巻、大月書店版『マル・エン全集』第19巻、国民文庫『マルクス回想』所収）も必読でしょう。またレーニンの「フリードリヒ・エンゲルス」や「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」（共に、岩波文庫版『カール・マルクス他十八編』所収）も読むべきでしょう。こうしたエンゲルスやレーニンの描くマルクス像には、一字一句も無駄がなく洗練されていて、まさに芸術作品を感じます。

岩波文庫版旧訳の第十二分冊は向坂逸郎先生の「解題」と「索引」になっています。解題は、一「『資本論』と社会主義運動」、二「マルクスの思想的発展」、三「マルキシズムにおける『資本論』の地位」、四「『資本論』の内容」、五「あとがき」となっています。この解題を本文に先駆けて読むのも良いと思います。この解題は、『資本論』をめぐる（労働大学刊）に、五「あとがき」以外が収録されています。

（二）『資本論』岩波書店記念版から

『資本論』翻訳を支えた松本の人々　向坂先生二回目の『資本論』翻訳は、『資本論』（第一巻）刊行百年を記念してのもので、1967年の刊行、翻訳の原本の変更が次のように記されています。

「この翻訳は、モスクワのマルクス・レーニン主義研究所とベルリンのマルクス・レーニン主義研究所の協力になるドイツ版『マルクス・エンゲルス全集』の中の『資本論』を底本とした。現在行われている『資本論』原本のうちで、最も校訂の正確なものであると考えたからである。しかし、私は、二種の英訳本、フランス訳、および原本の初版、後のエンゲルス版、アドラツキー版、カウツキー版等を参照することに力めた。」

私は、学生時代この記念版を大学生協の書店で初めて手にしてから、購入までに5年もの時間を要しましたが、最も気になっていたのは次の様な「訳者まえがき」の一節でした。

『『資本論』訳稿は、信州松本の扉ではじめられ、ここで終わった。記念版もまた、ここで始められ、ここで完成された。それにつけても思いおこすのは、終戦後始めてこの地を知り、それ以後、ここが私の仕事場のようになったことである。終戦後のおもな仕事は、ここでなされた。その間つねに松本市島立の百瀬嘉郎君は、万事私のために多忙な時間を割いてお世話してくださった。終戦後の混乱の中に、松本の東南、静かな山の中にある扉を紹介され、食料から、医者さんの徳田安儀さんとともに、私の病気の世話までしてくださったこともあった。お二人に感謝の言葉もない。

私は、また扉の斎藤忠房君御一家のいつも変わらない御親切を想わないではいられない。ことにこの記念版のための約半年間、毎日の食事のこまかい、しみわたるようなお心づくしで、健康に何の障害もなく、仕事をつづけることが出来た。いまさらのように人間の温かさを思う。」

私の生地、そして郷土史 なぜに気になっていたかと言うと、先ず翻訳地の扉が生家近くの温泉（当時は「扉鉱泉」と言っていました。）旅館である事、加えて松本城近くの徳田医院の先生の名があり、それに加えてとにかく百瀬嘉郎さんは、是非とも会ってみたい方でした。

当時私は松沢弘陽教授のもとで、臼井吉見の『安曇野』（筑摩書房刊、当時未完で『展望』連載中）を片手に、松本出身の木下尚江を中心に、信州穂高町出身で新宿中村屋を創業した相馬愛蔵・黒光夫妻、彫刻家荻原碌山等に関する事柄を調べていました。

帰省すると郷土史の大家である信州大学教授の有賀義人先生、高校時代に政治経済の授業で木下尚江を大きく取り上げていた上島忠志先生（この恩師は新聞記者出身で、授業では教科書は一回も使わず、基本的にその時の新聞の社説が教材でした。国語は社説を読める力をつけるために必要であり、政治経済の授業はその社説を理解し、それに対して自分の考えを持てるためにこそ必要だと言う方でした。東大法学部で丸山眞男先生に提出した「政治におけるロゴスとパトス——木下尚江の思想をめぐって——」は、戦後木下尚江研究の先駆け的論文と言われています。）、松本市教育長を十年も務めた桐原義司先生等々を訪ね歩き、資料を紹介してもらったり、オネダリしていただいたりと言う日々でした。

こうした地元の尚江研究家の一人が、木下尚江顕彰会会長の百瀬嘉郎さんでした。

* * ちよつと寄り道①—

木下尚江と平民社と『宣言』 尚江の名は高校時代に知りました。日本史の教科書に、唯一登場する「松本出身者」でした。松本の郷土史、とりわけ近現代史を勉強するには外せない人でした。ここでは尚江について詳細を述べることは出来ませんが、そもそも、『共産党宣言』を購入して読もうと思うきっかけも、木下尚江にありました。

日本に於ける社会運動なり社会主義運動に関する画期的な出来事として、「平民社の設立と『平民新聞』の刊行」が挙げられると思います。平民社は『週刊平民新聞』の刊行とともに書籍『平民文庫』の発行もしていました。第一冊目の文庫本こそ、木下尚江の『火の柱』という反戦小説です。戦前は発禁にもなっていたのですが、戦後は岩波文庫にも入った尚江の代表作でして、高校時代の日本史の教科書（和歌森太郎他著『詳説 日本史』二宮書店刊）にも紹介されていました。『火の柱』は英訳もされています。

『平民新聞』の創刊一周年を記念した1904年11月13日付の第53号は、堺利彦・幸徳秋水訳の『共産党宣言』が掲載され（第三章は省かれています）、それゆえに『平民新聞』は発禁となり、発行人兼編集人の西川光次朗と共に堺と幸徳は起訴されます。この裁判での弁護士（当時は「代言人」の一人が、木下尚江でした。当時『宣言』を読んだことのない私にとつての興味は、「弁護士尚江は、『宣言』をどのようにとらえていたのだろうか？」というものでした。幸徳秋水全集第五卷（明治文献刊）に収録されている事を知り、これを買いました。この第五巻には後に第三章も含め、「学術研究の資料」と言う事で、1906年『社会主義研究』に掲載された『宣言』の全文も収録されています。

岩波文庫版では「ヨーロッパに幽霊が出る——共産主義という幽霊である。」と始まる『宣言』ですが、堺・幸徳の初訳の冒頭は「一個の怪物欧州を徘徊す、何ぞや、共産主義の怪物是れ也」です。旧字旧仮名のこうした翻訳文は、当時の私には全く対応困難な文章でした。

堺利彦の『宣言』は、戦後1945年に彰考書院から刊行され、1952年には装いも新たに（マルクス・エンゲルス・堺・幸徳・平民社の写真入り）刊行されました。この1952年版により2008年に復刊されたアルファベーター社発行の『彰考書院版 共産党宣言』は、堺の気持ちがじわじわと伝わる、それこそ想いの詰まった『宣言』と思います。

—寄り道①終わり* *—

『マルクス経済の方法』、『マルクス伝』と『資本論入門』 さて、記念版の「訳者まえがき」には、訳者向坂逸郎先生自身による「『資本論』勉強の手引き」と言える一節がありますので、紹介させていただきます。

「私は、この版には、解題を書くことをしなかった。いまでは私自身『マルクス経済学の方法』（岩波書店）や『マルクス伝』（新潮社）を書いているし、また岩波新書で『資本論入門』を書くので、これらを参照していただければありがたい。ことに最後の『資本論入門』は、『資本論』記念版とともに、私自身のささやかな『資本論』百年の記念のつもりである。」そして、序文を読むと、この記念版の解題Ⅱ『資本論

入門』も扉（明神館）で書かれたことがわかります。そして、向坂先生は「明神館」のパンフレットの為に、二回にわたって筆を取られています。

という訳で後に記念版を購入した時、続いて入手したのは『マルクス経済学の方法』『マルクス伝』（合わせて新潮社の『選集』をセットで。1977年頃には、全て新刊で入手可能でした。）、『資本論入門』の三冊、そして『マルクス経済学の基本問題』（岩波書店）もでした。

『マルクス経済学の基本問題』も必読の一冊です。岩波文庫『宣言』の「解説」の中で、向坂先生は「なお『共産党宣言』については、拙稿『共産党宣言』百年』（『唯物史観』第四号）とラスキ『共産党宣言への歴史的序説』（山村喬訳）を参照されたい。」と記されていますが、前者はこの『マルクス経済学の基本問題』に収められていますし、後者は当時法政大学出版会から刊行されていました。『共産党宣言』百年』は、『宣言』理解に欠かせない文献だと思います。又『唯物史観』第四号の大内兵衛先生による「1848年」という論文（岩波書店『大内兵衛著作集』第十巻所収）も、合わせて読まれると良いと思います。

『マルクス経済学の方法』の前書きには、この著作は河出書房刊『経済学方法論』全三巻を要約したものであるとともに、河出書房の経済学全集第七巻『マルクス経済学の形成』の第一部として書かれ、これを増補して岩波書店から刊行されたことが記されています。当時は『経済学方法論』全三巻、『マルクス経済学の形成』といった書籍は、古書店でも全く入手困難な古本でした。

手元に『経済学方法論』全三巻がありますが、そのうちの一セットは、伊部政隆さんへ向坂先生が署名入りで贈呈された物です。伊部さんが亡くなられた時、整理に入った古書店の店主から連絡があり、「伊部さんの向坂先生関係の書籍は、君がまとめて引き受けてくれるのが良いと思う。」と言うことで、私の手元にあります。伊部さんは「松本の友人達の一人」として、向坂先生の随筆に度々登場する松本の名士でした。

* * * ちよつと寄り道② -

松本の友人たち 向坂先生の随筆集に『わが道を行く』（労働大学刊）があります。そして、私の手元にはこれの「特別版」と言えるものがあります。

この随筆集の中に「松本の友人たち」という一文があります。伊部政隆夫人の文字さんが亡くなられた時の、伊部さんと向坂先生のやり取りが記されています。

私が「特別版」と言う『わが道を行く』は、残された資料から推測するに、松本の有林堂書店の協力を得て、労大刊のものに手を加えたものです。

先ず表紙をめくると、「この本について」という一文が貼られています。それは伊部さんの親友であった百瀬嘉郎さん、そして丸山きわ子と言う方の連名によるものです。また、「松本の友人たち」の本文の始まりの頁には、滝川太郎画伯が1950年に描いた伊部文子さんの肖像画を写真化したものが貼られています。

ちなみに、向坂先生が伊部さんと戦後日本の再軍備をめぐる大論争をし、注文した蕎麦を食さずに別れたというのは、女鳥羽川沿いに今も当時の姿で営業している「弁

天」という蕎麦屋です。滝川画伯は子供の頃、この「弁天」で丁稚奉公をしていたそうです。伊部さんは滝川画伯に絵を習う等、親密な交友があったそうです。

伊部さんの行きつけだった「弁天」対岸の喫茶店「おきな堂」は、旧制松本高校生のたまり場で、来店者記述ノートには斎藤宗吉、辻邦夫、熊井啓、小塩節と言った方々の名もあり、滝川画伯や草間彌生も通ったレトロな喫茶室です。名ヴァイオリニストのガロア・モンブラン（後にパリ・コンセルバトワール学長）が戦後間もない松本での公演の折、「おきな堂」で食事をした写真が今も飾られています。モンブラン夫妻の通訳をしたフランス帰りの滝川画伯が、一緒に写っています。また、二十世紀を代表する名ピアニストのクルトーですが、戦後松商学園高校体育館での松本公演時の通訳は、向坂先生と関係の深かった石井拍亭画伯でした。

さて、百瀬嘉郎・丸山きわ子両氏による「この本について」を全文紹介させていただきます。向坂先生が登場します。

「伊部さん御夫婦の交友は極めて広範囲で政財界・芸術文化面は勿論その他の面でも知人が多いのでありますが、その中でも夫君政隆氏と向坂逸郎先生との交わり、夫人文子さんの勅使河原蒼風先生に対する深い理解と敬愛の念は、蓋し特異なものではないかと思われるのであります。

特に前九州大学教授向坂逸郎先生は資本論の翻訳者として、現在は社会主義協会の代表で思想的にも生活環境からも相当へだたりを感じられるのであります。それらを超えて美しい友情で結ばれていることは、所謂君子は和して同せずの古語を、そのまま現代に見る感がして、私達の友情のあり方に今更の如く深い感動を与えるのであります。

今ここに文子夫人の三回忌を迎えるにあたり、向坂先生の近著「わが道を行く」（171P）の中に収められた伊部夫妻に関するエッセイを皆様方から読んでいただき、これを友人一同の追悼文として故人に対する追慕の念を新たにしていただけたらと願ひ、代表として一文を添えました。

昭和五十一年九月十三日

友人

百瀬嘉郎

丸山きわ子

—寄り道②終わり**

はじめて手にした『資本論』

三十年以上前でしようか、ある写真週刊誌に、「二十歳前にマルクスを読まぬのは馬鹿であるが、二十歳を過ぎてマルクスを読んでいるのは大馬鹿者だ。」と言うようにあったことを記憶しています。私が初めて『資本論』を購入したのは二度目の就職先である松本市役所に職を得、条件付き採用が切れたその日でした。職場に近い、今はなき松本の老舗書店「鶴林堂」に並んでいたものです。当時はそこそこの書店には、文庫版『資本論』と共に、四冊セットの記念版『資本論』も揃って並んでいたものです。

折によっても大学の卒業式の日でした。経済法の演習で独禁法と財政投融资の研究テーマで私を指導してくれた丹宗昭信教授（助教授時代は九大）の餞の言葉は次の様

なものでした。「君は『資本論』を読まなかった。社会に出て君が持つと思う疑問には『資本論』が答えてくれる。本気で勉強する気なら、向坂先生を紹介しますよ！」と。

そして再就職の報告に、郷土史研究でお世話になった、前松本市教育長の桐原義司先生を訪ねた折には、「戦時中、改造社版の『資本論』で教員仲間と読書会をしていた。『資本論』は是非読みなさい。」と言われました。桐原先生は、戦時中発禁になっていた木下尚江の著作を網羅して収集し、隠し持っていたと言う方ですが、(先の上島忠志先生は、東大学生時代に桐原先生の蔵書もお借りしていたようです。)加えて、戦時中に「隠れて『資本論』の読書会をしていた。」と聞いて、再度驚いたものです。

当時の事として、初めの就職先は大学三年時に内定(形式的に四年生の解禁時に試験がありました。)していたのですが、大学四年の秋に起きたオイルショックの波で、内定先は二千人の人減らしをすることになったのです。私にとつては、大事件でした。そんな訳で、卒業後二ヶ月の自宅待機を経ての六月入社でした。民間企業での一年数カ月の生活は、丹宗教授の卒業式での饒の言葉が、脳裏をかすめる日々でした。

辞して実家に戻り、木下尚江研究でお世話になって来た信州大学教授有賀義人先生の研究室に度々お邪魔する日々を過ごしていたのですが、ある日「君には、憲法を守って仕事をします！」という職場しかないな！それに、郷土史を続けるなら松本市役所がいいと思うがどうしたものか。公務員試験の問題集を三冊(上級・中級・初級)は、全て暗記するくらい勉強してから受験しなさい。受かるまで、研究室への出入りは禁止だよ。」と言う、それは強烈な教育的指導でした。二次試験での論文試験のあとにある面接試験については、アドバイスもしていただきました。

再就職が決まり、入庁式で宣誓書(憲法を遵守して仕事をします!)にサインし、半年後に条件付き採用が解除され、その記念に購入したのが『資本論』岩波書店記念版です。ここから大馬鹿者への道を歩むことになります。

繰り返しになりますが、記念版で紹介されている『マルクス経済学の方法』、『マルクス伝』、『資本論入門』に加えて『マルクス経済学の基本問題』、そして『経済学方法論』は、『資本論』の理解には欠かせぬ書籍だと確信しています。

『通信』の読者の皆さんは小島恒久先生の『経済学入門』をご存知と思いますが、このテキストに寄せられた向坂先生の「小島恒久君くその人、その文」には、「小島君は学生時代からすぐれてよく出来るひとであった。戦後私は、九州大学で経済原論の講義をしていたが、その間提出された試験の答案やゼミナールの論文の中で、彼のは、忘れっぽい私が今もなお記憶しているほど光っていた。」という一節があります。ここにある「九州大学」での「経済原論の講義」録が、『経済学方法論』です。

『経済学方法論』全三冊は合本として1979年に、『マルクス伝』は1983年に、『マルクス経済学の方法』は1988年に、それぞれ新装されて社会主義協会から刊行されました。残念ながら、私はこれらの再版を知りません。

* * * ちよつと寄り道③ —

『資本論』と『マルクス伝』 原野人さんが『社会通信』1215号で『資本論』と

共に『マルクス伝』の読書を推奨されているのですが、旧訳岩波文庫版第一分冊での翻訳のお手伝いもされ、東京大学教授だった鈴木鴻一郎氏は、次のように記されています。

「この『マルクス伝』は、はじめて経済学者の手になる作品として、かずあるマルクス像のうちでも独自の地位を占めるものだということは、何人も否定することは出来ないのであろう。そこで、この独自のマルクス像に刻みこまらねばならない。これは、もはや「万国の労働者、云々」という文字だけでなく、これに加えて「資本論の著者」または「近代社会の経済的運動法則の発見者」という文字を添えた方がもつと適切である、ということである、ということになるかと思われる。私は、こういうユニークなマルクス像が、ほかならぬ今日の日本において見事に彫りあげられたことを、この『マルクス・エンゲルス選集』の完成とともに、深くよろこぶものである（この『マルクス伝』は『マルクス・エンゲルス選集』全一六巻の一部をなすものである）。（『ユニークなマルクス像』向坂逸郎『マルクス伝』／新評論『一途の人』東大の経済学者たち）所収）

鈴木鴻一郎氏は、向坂逸郎先生の『マルクス伝』は、『資本論』の著者マルクスに焦点を当てた伝記であることを述べ、『資本論』が闡明した「近代社会の経済的運動法則」の発見者としてのマルクス像、すなわち『資本論』の完璧なる鳥瞰図ともいえる、全面的な解説でもあることを述べているのだと思います。向坂逸郎著『マルクス伝』は『マルクス・エンゲルス選集』全一六巻の一部をなす」とありますが、この『選集』と旧訳岩波文庫版『資本論』からの適切な引用で、『資本論』への道歩んだマルクスを語っています。そうした意味で、『マルクス伝』を読むには、手元に新潮社版の『選集』と旧訳岩波文庫版『資本論』を置いておくくと便利です。また、鈴木鴻一郎著『資本論へん歴』（日本評論社）、『資本論』と日本（弘文堂）は、楽しく読める「資本論物語」です。

向坂先生のお弟子さんで理論経済学者の平田喜久雄先生は、『資本論』研究を志すものとしては、向坂逸郎著『マルクス伝』（新潮社『マル・エン選集第十三巻』）は、『資本論』とともに、座右の書としておきたい。（法律文化社刊『資本論研究入門』244P）とも記されています。

この『資本論研究入門』についてご自身は、『資本論研究入門』と題する本書は、その全体が、恩師向坂逸郎先生の諸著作の模写であるとの批判をまぬがれえまい。しかし、わたしは、その批判を特に不名誉とは思わない。というのは、『資本論』の精神は、先生の諸著作のようにはか伝えようがないと信ずるからである。」と述べられています。『資本論研究入門』の最後は「参考文献」で締めくくられており、前述の『マルクス伝』は、このコーナーで語られています。ここでの「参考文献」の一覧は、本当に参考になります。

『資本論研究入門』は増補版も刊行され、『資本論』の究極的目的とは何か」が付論として収められています。関連して平田先生には「いわゆる『労働者階級の窮乏化法則』―『労働者の状態と運動』分析における基本的視点」『労働者の状態と運動』松隈芳男編著／法律文化社刊所収」という論文がありますし、単行本として『資本論』

の論理』(法律文化社)があります。

『経済学方法論』、『マルクス経済学の方法』は簡単に読めるような本とは思えません。勉強する時、平田先生による『経済学方法論』の学習』(一)〜(三)／『社会主義』1982年6月号〜8月号、また、和氣誠先生の「わが導きの灯」『マルクス経済学の方法』／『社会主義』1988年6月号、そして山藤彰さんの「資本論・論争の焦点 向坂逸郎著『マルクス経済学の方法』・『資本主義における失業の不可避性』／『社会主義』1988年7月号〜12月号」は、「導きの灯」となるでしょう。

—寄り道③終わり*—

(中澤 秀行・つづく)

◇ 読者からのおたより ◇

資本論第一巻刊行一五〇年とロシア革命一〇〇年 購読料の残金の連絡頂きましたがカンパとします。少額ですが使ってください。「進路」からの購読者ですがNITを退職して9年、今年古希を迎えることになりました。来年は資本論第一巻刊行一五〇年とロシア革命から一〇〇年の節目になりますので改めて「資本論」と「帝國主義論」、「国家と革命」の学習を始めようと思っています。今後ともよろしく願っています。

(松山市・片上憲一)

組合・社会主義運動の指標 長い間大変お世話になりました。組合・社会主義運動の指標となり、奮闘されたことに対して、心より感謝申し上げます。

この春、再雇用を無事勤め上げ、現在フリーター。働いているときは年休がどれだけ大事かと思っていました。いまは自分で計画が建てられる、ちよつびり自由人の楽しみを得た思いです。

この一年間は「戦争法反対栃木市民の会」にも参加するようになり、栃木県の野党統一候補(田野辺孝男氏)の推薦を決め、戦争法反対の運動と参院選勝利に向けて地域の仲間たちと取り組んで参りました。選挙結果は、保守の厚い壁に阻まれ、大きく水を空けられ惜敗いたしました。短期間での集票結果は大きな自信にもつながりました。この夏に結成1年目を迎えることが出来ましたし、今秋には1周年記念集会も開催予定です。労組員当時は一味違った運動を味わっています。とはいっても、その分家庭・地域での仕事も自然と増えてきています。

本誌とは思いつきせば、通信創刊当時からのお付き合いとなります。途中の自宅引越しの際には段ボールに整理しておいたものの、保管状況が悪くて一部はやむなく処分することもありましたが、処分する時は各号を見ながら惜しみながらの作業でした。デジタル化に伴うHPでのお付き合い、これからの活躍に期待をしております。なお、残金は少額ですが、カンパです。(栃木・川島薫)

一筋の光 ご連絡いただきました。誌代残金の件、カンパということでお取り扱ってください。それにしてもおよそ四十年ですか。長い間、お疲れ様でした。滑舌よく切り込む貴誌の存在は、闘いの戦線に身を置く多くの仲間たちをいかに励まし、荒れる大海の中でもまれる船に届く灯台からの一筋の光のごとく、今日まで指標を示し続けていただきました。とりわけ、国鉄闘争では、始まりから混乱の時期、解決期まで本当に助けていただきました。これまでのご指導にはありますが、これからも健康に留意し無理なく、時々全国の仲間たちに元気な顔を見せて下さい。私も一自治体に身を置く地方議員として、弱者の立場に立つてしっかり活動して参ります。(名寄市議・佐久間誠)

「青年労働者」を組織 長い間、「通信」(郵送)を有難うございました。思えば、東京からUターンして三十年、それ以前は大田で昭電の開田さん達と滝野さんを講師に学習会に時々参加。三十年前と云えば中曽根政権時代で「行革」の先頭を指揮していたのが、千厩出身で慶応大教授の加藤寛でした。また、その当時悪法の「労働者派遣法」が施行されたのもあの昭和六一年でした。

その後、どんどん改悪されて現在に至ります。年金も払えない不正規労働者が年金生活者になった時には、更に多くの「生活保護世帯」が増えて大変になると云うののです。国家財政やお金持ちの財布を心配するわけではありませんが、何が「先進国」なものかと思っています。「泣かず飛ばず」の三十年でしたが、滝野さんの「通信」がどんなにか支えであり、人生の指針であった事かと。本当に長い間お疲れ様でした。群れから外れた「二匹狼」は何の役にも立たないと痛感しています。また学習活動を活発にし「青年労働者」を組織することの重要性を痛感するものです。「社民党」の凋落。一連の選挙や「若者の保守化」に驚くばかり。本当にすさまじく止むことのない「資本主義」の攻撃であったと思っています。僅かの残金ですがカンパさせていただきます。(岩手・小野寺昇)

さいなら原発 10・23びわこ集会 「御嶽山の噴火は、日本全国に戦慄をもたらした。しかし、それよりはるかに多量の噴出物をもたらす『超巨大噴火』が、この日本で起こるおそれも十分にある。もし九州で起こったら、火砕流や大量の火山灰は川内原発、ひいては日本中の原発に何をもたらすのか。火山の基礎から解説し、絶望的なシナリオを直視する。」と、講師の古儀君男さんは著書(岩波ブックレット)で語ります。

この十数年、古儀氏は世界各地の地質名所を訪ね歩き、市民を対象に講演を行うなど「地学」の普及に努めています。聴講生を引きつけてやまない熱心な講義は大好評を博しています。高浜・美浜原発の四十年越えの老朽原発再稼働にもどんだんGOサインを出す「規制委員会」と安倍政権。これと闘うためにはまず学習を。左記、お気軽にご参加を！ (滋賀・稲村守)

と き 10月23日(日)午後2時〜4時 ※集会後、関電滋賀支店経由でデモ行進。
ところ 解放県民センターホール(公財) 滋賀県人権センター

大津市におの浜4丁目1番14号 関電滋賀支店北西の緑色のビル

岩手・岩泉町台風災害 台風10号で大きな被害を出した岩泉町。20歳の時、岩泉小学校の夏節冬季分校で代用教員をしていました。孤立した安家や有芸水堀にも大学サークルの夏季活動で毎年訪れていました。5年ご無沙汰になっているため、年内には時間を取って岩泉を訪ねるつもりです。

「日本政府による沖繩への弾圧を許さない集会」に、是非ご参加を！ *日時 9月28日(水)18時〜(集会の後デモ) *主催 止めよう辺野古埋立！ 国会包囲実行委員会。(毛利孝雄)

ホームページをプリントアウトし活用 台風一過:昨日、一昨日と三〇度越え。九月の音威子府では考えられないような真夏日。それでも今日は涼しくなり、虫の声が秋らしさを奏でています。

社会通信購読料の件ですが、「滝野さんの活動費に」ということで一致。本当に微々たる額で申し訳ありませんが、何かに役立ててください。※送本で購読していた仲間たちは、通信が届くのを毎回楽しみにしていたので、残念がっています。一〇月以降は、ホームページをプリントアウトして、活用したいと思っています。田舎にいる私たちにとつて、社会通信は大切な学習資料ですので、今後も滝野さんの奮闘に期待しています。(おといねっぶユニオン・杉山均)

日野原秀明さんをお手本に 小生、永見に居た時は、パソコンで大阪の関西棋院の担当者と囲碁を楽しんでいましたが、新居浜へ引っ越してからは碁をやめており、パソコンを利用しておりません。仕事が忙しくなったことと、老化現象の対応に追われているためです。新居浜医療福祉生協には、診療所が3箇所があり、その中の四二年前からある最初の診療所に、小生が動員されています。

十一月からの「通信」は、西条市議会議員の高橋章哲(あきのり)さんに印刷してもらい、受けとることにしました。高橋さんは新社会党愛媛県本副委員長、大阪のコンピュータ大学卒です。九月三日は、松山市内で、愛媛県在住の北大関係者の同窓会があります。九十歳で現職というので、乾杯係を予定されています。小生、ボケ防止で楽譜とピアノを習い始めました。九十の手習い。

今回の参院選、野党連合のお陰もあって、三十二の一人区で十一人当選させてくれました。愛媛は永江孝子さんと、三二万票でしたが、八千票の差でまきました。八月末の第21回愛媛県本部大会では、永江さんも来賓で、今後の活動について積極的に発言。次を楽しみに応援しています。愛媛県の新社会党も、市議会議員の立候補が当面三人、必勝を期しています。県本部大会は立派に終わり、小生は委員長に再選。小生、日野原秀明さんをお手本に頑張るつもりです。(愛媛・真鍋知巳)

ホームページを見させてもらう 長い間お世話になりました。今後は、ホームページを見させてもらいます。残金は、少額ですがカンパします。私も、八十歳になりました。(神戸市・長岡照良) カンパ要請等ありましたら連絡を 先日、前納返済について手紙をいただきました。返済金は少ないのですが、カンパといたします。ホームページは無料ということですが、カンパ要請等ありましたら連絡ください。ご活躍に敬意を表します。(鹿児島市・川路孝)

経費負担は当然 今後インターネットで拝見する事になると理解しておりますが宜しいのでしょうか。当然手数料や費用等があると思います。インターネットならスポンサーがついていくと思いますが御社はそうした存在はないと記憶しています。最低でも費用を仰せ頂かないと、拝見しづらく思いますし、経費負担は当然なので教えてください。残金は、頂く理由はございません。(柏市・柳田祥子)

編集部より 多くの方々から激励やカンパ、「こうしてホームページ活用する」との嬉しい便りや、郵送がなくなることへの惜しむ声もいただきました。申し訳ないやら頭が下がります。お詫びを兼ねて、今年の十一月一日号までは、これまで通り郵送・送信をすることにします。その後はホームページの活用・宣伝・拡散を心から願っています。また、将来はカンパ要請するかもですが、無料です。ホームページは「社会通信」で検索しますと、創刊号から直近号までのすべてが閲覧できます。